三國一夜物語

壹

へ 13
3021
1

門へ13
3021

曲亭馬琴翁著編　全部
歌川國直画圖　八冊

富士
淺間
三國一夜物語

東都書林　文永堂梓

三國一夜物語序

夫古今來說部書、指不勝僂、何唯牛棟而已哉、其談時事、說神怪、因事托諷、醒蒙昧之耳目、其意深矣、曲亭先生少負異才、結廬于飯台之山麓、鍵戶吮毫、留心於陰隲冥報之事、手鈔不怠、著録數十種、既刋布于世、嗚呼

昭和九年
七月一四日
購求

人之嗜望無涯苦海愛河比比沉没孰不恐哉苟殃可以懲傾邪祥可以
懲吉士寓風人之旨於噱笑之中自
警復警人先生原具一片之濃意非
漫然以風流文采見長也其關係於
人心世教豈淺鮮哉世之閲者不可
置爲冗籍也

文化二年夏五月上浣
著作堂塾生魁蕾子應先生之令
題於簑笠軒雨窗

音迹冥目頂も亦
史記東路行山毋數毋
不二乃修澤

浅間左衛門照行

雲かゝる浅間山乃
いきほひ
人のきゝ恐るゝ
こゝろ也 志夢

三國一夜物語總目次

○嘉慶二年戊辰秋七月より應永元年甲戌春二月に至りて物語まゝ十二年の事ゐ係る。

第壹編　足利義滿公富士を繪にして富士を得ゐる事
第貳編　富士右門龜を救ひ及商人五四郎が事
第叁編　駿河の小雪尾張路の櫻の事
第肆編　古廟の焔消富士右門を燒事
第伍編　富士太郎森羅殿の舞樂ゐ召る事
第陸編　淺間照行彌陀寺の法會ゐ詣る事
第漆編　赤間關の両妓嫖客をあらそふ事
第捌編　三雲鼓を打て讐人ゐ擬事
第玖編　妓女節ゐ死して夫ゐうる事
第什編　富士太郎孤嶋ゐ仇を殲る事

○続計十編全部七冊

總目錄畢

題賢婦櫻子

賢女心如鐵獨行寃敵州由来多少事
惟為呼天愁

題妓女浪路

楊柳青〻楊柳黄青黄變色過年光姿
似柳絮易憔悴郎如柳絮太顛狂

乙丑仲夏　養笠隱居曲亭書

富士浅間三國一夜物語巻之一

東都　曲亭馬琴著編

第一編　足利義満公富士を翫して富士を得給ふ事

元弘建武の擾亂より。蠻觸の爭ひ止時なくして。數十年ふして南帝の聖運傾き。和田楠も山名氏清ゐ攻られて。赤坂の城陷てけるまゝ。和泉河内をも押奪ひ加旃紀州の合戰ゐ宮方うち負て一方の大將と頼ま奉てゝる。橋本治部丞も討ましゝゝ。橋本が女兒櫻子ハ家臣村主兵次郎夫の者ゐ扶掖らまゝ。往方もあらぢ呻吟出ぬさまゝ。足利三世の將軍前左大臣源義満公天下一統の功

成て軍勢ようやく無支ゐ富士山遊覧あるべきとの嘉慶
二年六月上旬既に華洛を發ゐ御内外様の大小名へ
武士三千餘騎童扈従数百人。青侍雑色走衆に至る
まで。おの〳〵裝束に綺羅を竭し。そを晴とぞ打扮ける。斯て
義満公へまづ紀の浦々を遊歴ありて。伊勢尾張路を過て
日数径て駿河の國府に着ゐ。國守今川上總介泰範
ときを迎てさる〳〵歎待らそまろ。四五日のうち濱出の御遊
ありべーそて朝まづきよう促し言せば義満聽て出御ありて。
数十艘の樓船を浮べ三穂の海方を漕せゐ。御船ゐ。

金銀珠玉をちりて鳳鳥花草を鏤ゐ錦の幔幕綾の
水引風に翻ゐ浪に映じ。水手舵工のもの歎乃を發して。柏子
おりーろう歌ひつまけるゆぞ彼歡樂きはまりて哀情多しと
賦うけん。漢帝のむーしゆも勝まる心持を頃は秋のそらあ
ふして。残暑烈しき折ゐる吹風衣を融して。人〻の汗を
忘ま雪へ富士が峯に降布て。四時の壯觀も目前ゐ。
ゐ頭を回して向上べ南に久能山ゆ。西に田児清見潟
ゆ。三穂の松原磯馴し松も君が齢に算まべいくそだく
その数もちゆまて。塩焼海人の煙を画に寫ゐ筆に
更に及びがーとの日も泰範主儲し奉り勸盃禮義を

正して酒酣なりしとき義満眺望ゐ倦ぎして宣ふやう。泰範ハ貞世入道了俊が甥ゐして風月のオその聞えあり。富士の事實その名所なども詳なるべし洛の裏ゐ空まかしを宣ふとゑび泰範答ヤスやう。台命の如く幼きより了俊ゐ従ひて物學びなぶら。駕オゐして文の道ゐ疎けゑび。覺悟せしなるとゝども固辞奉るも畏けゑべ口ハその槩略ばかりなべし。抑富士ハ。その山駿河ゐ隷て四州ゐ跨る所謂南西の方ハ駿河ゐ屬し。北東へ相摸ゐ屬し。西北ハ甲斐ゐ屬し。東南ハ伊豆ゐ屬を瓦關の八州よりゑを望ゐ山の形何國も異なるなし。その北面ハ山の脚長く南面ハ殊ゐ險阻し甲斐より登るを吉田口といひ。駿河より登るを大宮口といひ。相摸より登るを嵯峨といふ。坂路絶頂ゐ至るまで九里餘也直立してゑを算ゑべ北四町ありとぞ。雪ハ六月望の日ゐ消て其夜降り。古歌ゐ見えていゑ寔ゐ三國第一番の名山蓬萊不死の仙境なり。この山孝靈天皇の五年夏六月ゑて見る蓋この年近江の湖水一夜ゐ湧出その土をもいちて富士山とゑるなり。世ゐハ傳へいまゑど萬葉集山部宿禰赤人の歌ゐ天地之分時従神左備手高貴寸駿河有布士能高嶺乎天原云云とあるを思へば神代よりある山なり。且富士ハ郡の名を取と本朝文粹ゐ見えて或い

足利義満公
三穂の浦に
操舟して
富士山を
御覽ぜ國守
叉範との日の
御導べ

不盡不二とも書又竹取物語の説に根きて不死とも書い
歌ぬハ浅間とも詠て祀ところの神浅間大權現ハ大山
祇命の女木花開耶姫命なり平城天皇大同元年神社を
山の頂に建役行者ちゝめて登山し空海圓珍の両大師許
多佛像を作りて安置せり浅間とハ富士の一名なり
信濃の浅間が嶽伊勢の朝熊山あるをもて今ハ浅間と
声に讀のゝ元和訓あさまとハ朝隈のくを略せるなり朝日
影の山に映じて殊さらに栄あるもの賞美の名なるべし
浅間も朝熊も字ハ假りるものなり朝隈の義なりとぞ
まのかゝ名取多し足高山田兒浮嶋が原ハ眼前に見る

或ハ消えぬらん人と定家卿のよゝめひし木枯の森ハ
倭文機山の向ふ或いつくゝる海と富士川とを歌ひけん
石花海有渡濱富士の鳴澤偽の橋など悉くやさんも
嗚呼がましゝそいへと辯舌爽に水の流るゝごく述ふけ
ゝ義満公御感浅ゝらぎ。げふも其許のりるごく浅間ハ
富士の一名なり。信濃の浅間が嶽ふけあさまて今の人ハ
うゝ古實をもゝぞゝるゝ。恭範が物がゝりふて予も一
首の趣向を得ようとて。

きのふまで富士の高嶺ふ見し雪の
袖のもうゝを田兒の浦浪

と詠じ給へば。恭範も上達部も只管稱讃まゐらせつ。君臣朋友こゝる興じ給へ折しも。初秋のそら定めなく。富士の笠雲聳ひろごり。さしも今まで晴わたる天。俄頃に結陰て一急雨のさを降来るあゝ。御船を三穂の汀に艤よせたゞ〳〵晴間をまちゐ給ふ。ほどなく雨止雲おさまりて。日もや西に斜なり。今の殺風景に興も竭んとせ〳〵。舞樂を奏まゐらせ命をまゐらせ。左中辯義資。權少將雅清春宮權佐豐光抔豫てその伎を嗜める大宮人管絃の席に臨み給へ原天王寺の伶人ども。浅間左衛門照行。近曽赤松義則に就て。將軍家に扈從し奉り。此度の供奉に召さるゝ。

大鼓の役を候じけゝ。めくて堂下の立部。田雪の袖を翻し繁絃急管の声一唱三嘆の調融洩として正始の音に叶ひ。箭詔九奏まゐれば。鳳舞魚跳り。天衆もとゝに來臨し。龍神も納受まゐらせ給ふ。昔三穂の松枝に天女天降つて。舞樂を奏しけるもゝくやとおぼゆ。曲の中央をゝし時。何とゝ云けん浅間が大鼓忽地に音律濁り。調ふのゝ〳〵乱れ〳〵。照行大に色あやし〳〵。席を去て十歩ばかりまゐて伶人秘曲を奏まゐらせ。音律を違へるものゝ。ことを竊聽べ五音立地に變ぜるあり。さゝど都會の地景。京城中邊ふもあらぐ。くる東海の渺〳〵たる。汀渚い蘆葦

のくめて。人住む里まで遠けれども。近きこゝろの音律をあらくるものあるべうもおがめど。もゝ南方の残業謀叛の凶徒ども。潛かに君を窺ひ奉るも又あるべうもぞ。ねがくは警固の武士に命せて。葦の叢中を捞しめようしと申をゆゑ近臣大に驚きて。供船の武士を召登せんも間遠なり。吾儕まづ向て穿鑿まゐらしとのたまへど。快船を打ちつれ。あまびの板を投げて。既に陸に登らんとす。洁處にいと汝れる樗の單衣を被て。腰に短き刀を帯破れる竹笠をうち戴て。一條の釣竿を持る男。葦の裡よりあらはれ出うまく癖者ぞ。こゝに生拘人と聞バ。彼男らの光景を見て大に怕れ忙

しく笠を擲遺捨。砂の上に領巾伏てのみ中辺鄙の隨夫大樹の御遊をあらぶ。漫にそふめりて釣しうるが。嚮の驟雨のよつて。御船をこの浦によせひしきもて。たゞめてその事を知ぬ。逃さ去らんと欲れども。路をけまゐ已ことを得ず。彼首ゆらくろひけらんの。その罪軽きにあらざるべ。仁君今徳を布て普く民を安ドのみと変りまげて恩免を蒙りをるべし。元来小人野心を挾む者にあらぬぞそらの浦に鎮りまをる羽衣明神も照覧あるべしとのたまへ。詐り。佩るる刀をとりて海面に投入れ義満公熟商しのふる形にて賤の男なれど言語動静由緒あるものとぞ。しくて。目今兵器を遠ざけて。赤き心を示しうる頭智尋

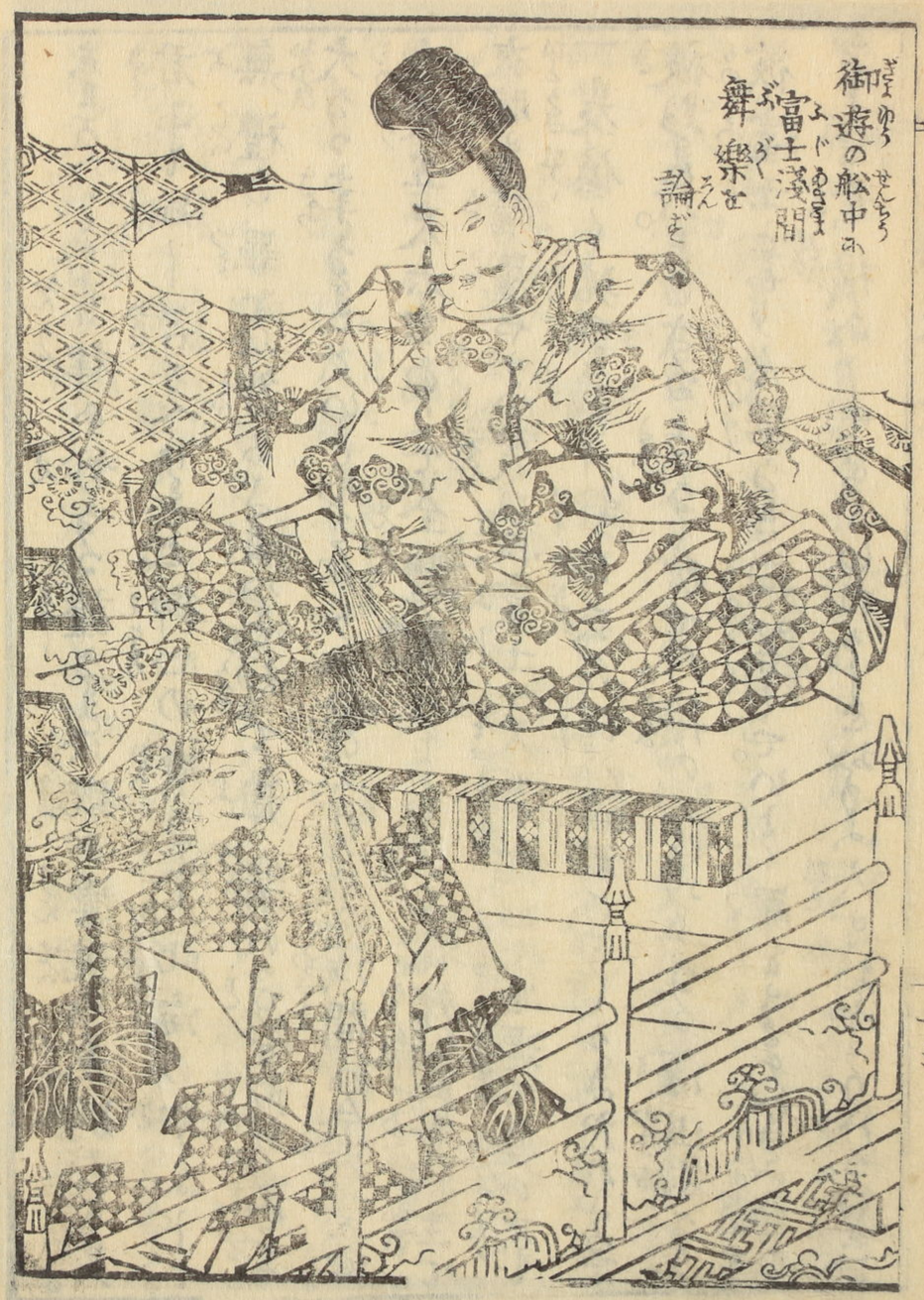
常の田夫野人のあふぐ。音律をきゝうるものゝやと御
らんぜらるゝ。その者とく將て参るべしと命まれば近臣うけたまはり
聽て快船に誘ひ登し。御座船ちかく引居う義満公則
近臣をもて伺が為体由緒あるものゝと乃名匿まぐを姓名を吉れ
質ふとう一ふ罪をも許べのゝべしと命下さるければ彼男い
よ〳〵こゝてやすやう。小人ハ菴原川のあるゝ茨木村に住る富
士右門知之とやゝ者ゆゑ先祖ハ住吉の伶人なりしが萩原院
（花園帝三奏の謳歌原院）の正和年中内裏に舞樂ありける時祖父富
士右京進知親その召に應じ〳〵しが其頃天王寺の伶
人浅間照蔭ハ正しき富士が従弟ゆゑ摂政冬平公へなり
まり仕へ〳〵やどに。ふる〳〵とのるを猜み忽地一家の親ゝを忘れ
遂に讒言しておのゝ搗おとしけるゆゑ。俄頃に富士を止られて
浅間をぞ召れける。知親本意なきのゝ推て參内をとゝ
ぶも。當時天下の伶人に浅間にまさる者あらじ。されば古歌にも
信濃なる浅間の嶽も燃るとゝを
富士の煙のうひやなるらん
と詠るぞや。富士ハ用なきものゝとて。御内へも入られぬ。
知親更におもなくて。こゝより家に引籠りて。世の交參
せざるゝやどに。浅間ハまた〳〵威勢をふる。勅命と偽て。富
士が家に伺へる。高峯と号し大鼓をも奪ひとるぬ知親

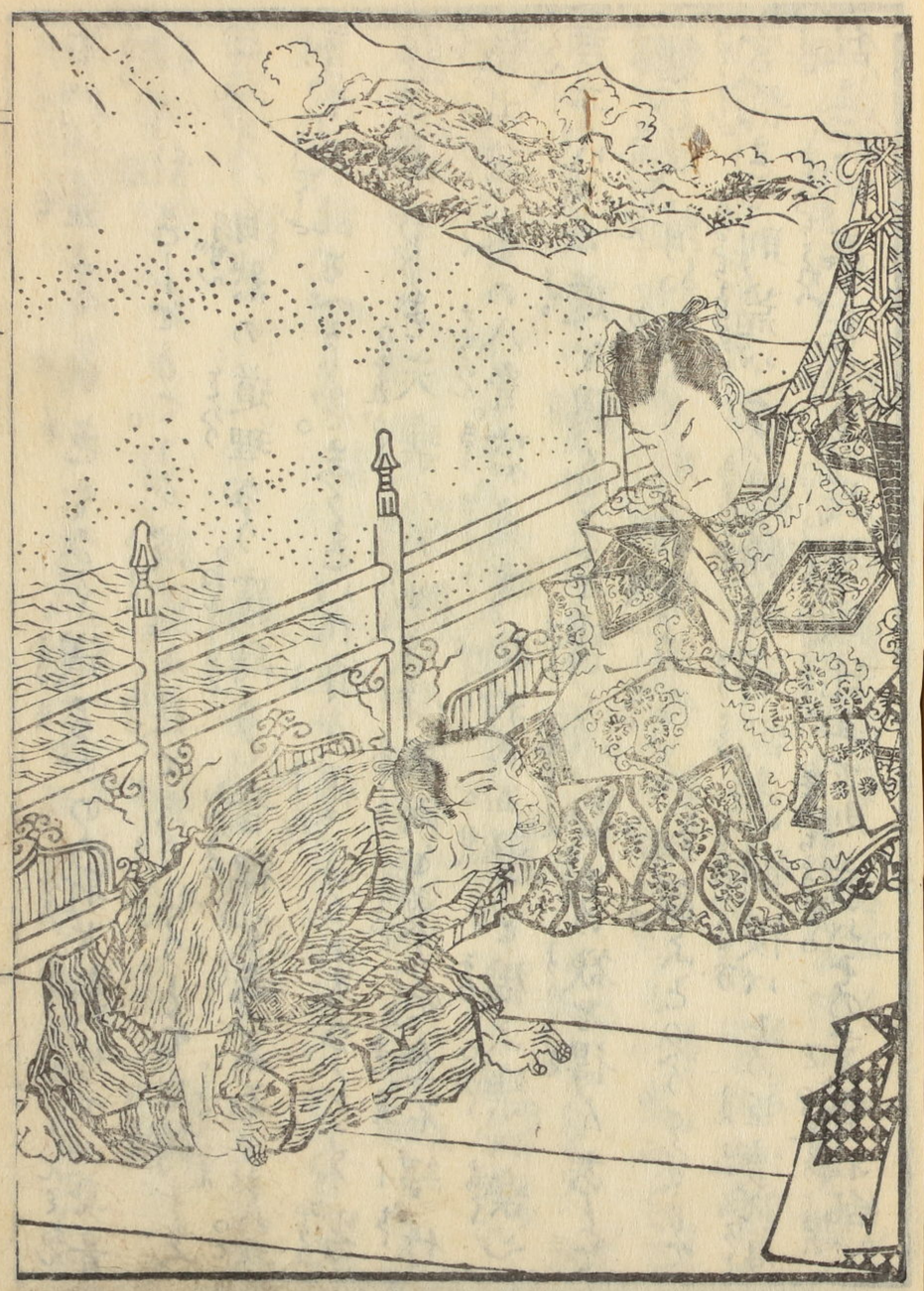
いよ〳〵安らぎおりぬれども虎狼路の横ぎるべき千万無量の憤を含みぬるぶらん。訟るふるひなく〳〵て只憂とのみおもひなそらん久〳〵病て世を去けるべ。終の家もおとろへ果ぬ。その頃知親が一子それがゞ為の父なりける。富士右近有知い。年いと少うして母とともの故郷を立去り本国なるべとの駿河国の来ってそこぐらす耕して母を養ひつゝも。音律の心を委ね。天性そのうの賢うしが薄命の為て時をひぐ。齢七十のして身まういひきさるべ家の楽譜の秘書を相傳し。今の難苦の世を経ども。その伎を愛ぜ父祖の及ぶへくもあらねど。そをぐしも又幼きよう。音律を学びいひしと一五一十をやせしべ。義満公聞食てきれば平人の

あらぎりけるべ。富士がるの豫て志ろし食ところうさいの徐村落の人とるるべ。学ぶとのいどもその伎のとおぐつるし。今日船中の舞楽のけうて。大鼓つるまうるの。きるのち徐がやせし。照蔭ぐ孫浅間左衛門照行とるべ。舞楽の古実覚悟あべ。委細の若へて個照行をして問せるべ。舞楽の古実覚悟あべ。委細の若へ個照行をせよと命けるこの時浅間い富士が飽までつぐ祖父を誹謗るを安てふく憤つ命のゆと阿ゝそひるし〳〵舞をさるうたるふとの厳命を稟て歓びの堪ぢ。徐ちるの舷のよう出富士右門の封ひてのよう。其許が先祖の拙うしを覆ハんとそ。わしるのいのるし。照蔭ぐ孫浅間左衛門照行の我

いと傍らくおりひるがへり序めーけまバ口を鉗うるふ幸ふ問答
するるを許ーゑバ。とゝふ鬱胸をたゝまぐーし。人ハ只その腹を
見て。その背を見ずとゝくども。るかその背めるるをばれる其許の
論ハそまこふも齟齬ー。腹のゝを見て背めるをあらざるもの。
ひゝー右京進知親の時ごふも。能藝拙くて。晴の舞樂ふハ
召まゞ。あるを況二代三代田夫とゝりて。笛ハ草苅童の
吹ものとおりひ。大鼓ハ早乙女ふ亭午をあらまる暗號とのゝ
おぼえつゝんふ。るふその伎ふ賢ゝんとまるハ。彼蚊蚋の山を
負ひ蟷螂の車を駐るふひとゝ〜身の程ひどをあらざるふあら
ざや。又五音の變ゝるをりて。其許ゞ彼首ふゝまゝ居ゝを

あまるハ。つゝゞ音律ふ妙なる證るまゞ既ふ雲泥の差別あるへハ。
君ふも知ゝ召るべけまゞ。御心の廣きこと。此海の如くふゝして。
無禮の罪をゞ咎めゝるハゞ。却て舞樂のるを問せるゝを。
大なる幸るまとひとうふのひゝくる。浅間ハ今茲九五歳。
身丈五尺六寸ありて。全體雪のごゝ白きふ頬髭青く生て。
衣服も綺羅やふ裝ひね。富士ハ又年紀四十を過て身の丈も
一尺低く。垢つきたる針目衣の裾ハ海松のごゝくるきたれるを
被ゝまゞ。そのさる立るゝゞてハ。花のゝさゝる深山木なり。
彼富士とやゝん据るき問答ゝて。いゝ罪をまゝべきふ命助
ゝしを幸福ふゝして。ゝくゝねゝをおゝへ人もおゝゝけるさまゞ


御遊の船中の
富士淺間
舞樂を
論ず



右門ハ羞うる氣色もなく。浅ましがりの所を熟ゆて身音律の乱きしをりてうぶ彼處ハ在をありようとて自誇しの之ごもそハ自然の道理うり。竊聽りの音律をあるふあらまハ五音も又乱るべらんぐ。あらまバ心身が優ようるふもなく。つぐ劣たるふもあらぐ。夫樂ハ天地四時風雨を象りて金石絲竹鞄土革木の八音宮商角徵羽の五聲を備ふ樂ハ樂ハ君子いその道を得んことを樂を小人ハその欲を得んあることを樂む又音ハ飲うり剛柔清濁和きて相諧ふとのうこをりて宮乱きて則荒バその君驕り商乱きて則陵バその臣壞れ角乱きて則憂きバ。その民怨徵乱きて則哀バその支動羽乱て則危けきバ。その財匱る五の者皆乱きて迭ゐ陵ぐこれを慢といふ。うくのごときハ國の滅亡日るしとぞ。彼呉の季札ハ樂を聽て國の興敗を考うしも。理のあるる所あり。かくる妙處ハ至ごとけき五音の變ぜしをりてきく人ありと知ぐごときハ聊珍しとさるふ足らぐと憚るいろるく答れバ。そ冷笑ひ人も俄ゐ耳を欹げふ彼ハ形ゆも似ど。樂のことハ細しうけるとおりの居うう。浅間ハ富士ゲまけゲたるしひめをかそ。まもく怒て發しいるく縱火を水ゐ消んとするとも天王寺の伶人ハよく圖を調あらせて物の音あぞうく諧うう世ゐ揭焉し。故いうふとうきバ。太子の御時の圖今ふるるを

所謂六時堂の前の鐘ハしてその声黄鐘調の最中うり。寒暑ハようてあぐりさぐとあるをもて二月涅槃會ようあるべき廿二日。聖灵會まぞの中間を指南とも。秘蔵のところ。加之つぶ家ゆへ迦楼頻の秘曲を傳受をいくハくとあるまぢと。ゆへ。右門合咲てげハくさるあるべ。ちゑ。ども本朝の樂ハ。神樂を權輿とも。祇園精舎の鐘ハ是無常院の声ゑさぐこそ秘蔵しるへる迦楼頻ハ沙陀調の曲ハして原天竺の樂ハけるゑ。迦楼頻ハ梵語ハして鳥の名ゑ。漢土ハある。を教鳥といふ。その鳴声苦空無我常樂我淨の義ゆまぞ。妙音天淨南竺國ハこの舞を傳ふ僧正ゑてこを受傳し。そのち唐山ハ留らを。先本朝ハ来て傳へるゑ。りつぶ神國の古實ハようぶ。日の神天の石磐ハ入まして磐戸を閉て幽居ままとき。八百萬の神ゑ。天安河邊ハ會合て舞樂を奏しゆへハ起ぶ。天竺佛國の樂諸行無常の調をもて本意とせぐ。ようてつぶ家ゆへ樂器の中大鼓を第一とゑハ此謂ゑりといふ。照行礒とゆきつぶ。又声をゑり立てりゑ。大鼓のゆへつぶ家その伎を究て他ハ讓ゑるゑ。まず其ゑ實を學ん。右門ぶいく大鼓ハ一名を鼓といふ和名鈔ハ鼓を於保豆ゑ美又四乃豆ゑ美と訓ぐ。申樂行まてゑり細腰鼓ハ大鼓小鼓の名あるをもて後世ハるゑて大鼓といふ。大

鼓を抱き抱ハ和名ハ豆〻美乃波知と訓ず。戰世ハ大ごと拍て兵を進め靖治ときハ拍て時をちらしその外揚鼓鞨鼓鼓腰鼓ハの數種あり。鼓ハ春分の音萬物皆鼓甲して出ず。萬物の發生を助るをもつての故ハ鼓とふとりくりこのゆゑハ韓人鼓を冐るハ。ゆゑ啓蟄の日を以てまろ人。雷の声を發するゆゑ象きり。〻〻純陽の樂器ゆゑ家ごとを第一の傳受とを秘説多しといへども。陽春白雪の言ハ下俚巴人の為ハ説て益なしといへ共行向毎ハ論破せらるゝ古戰已ハ敗績して口を閉ことめさるゝ。布鼓を鳴らして雷門をとろゝハ異るゝざるゝ義滿公を〻ゞも奉り。船中の人〻噫と感ずる声洋〻として耳ハ満り。義

満公ふたゝび命けるハ。〻〻東ハ遊び富士を眺そ富士を得ん。今天下新ハ治りぬゝゝ賤技のものとりくゞも藝を〻ゞ招く折るゝハ。まして樂ハ六藝のその一ツなりて民の心を善ハ。その人を感ぜしむるのいと深きものゆゑ。さゝゞ風を移し俗を易るハ樂より善ハなし。〻〻る堪能の人をゞゞ打落ハ埋〻おくべき。ゆゑ上洛せよ。〻〻ゞ浅間ハ命せて彼大鼓をも返し與へ父祖の本領相違なく下し賜ふべし。旦富士と浅間とハ原一家の親〻ありとゝハ。曩ハ泰範が浅間を富士の一名なりと〻ハもよく稱へり。〻〻ゞ互ハ遺恨を存ぜ〻ゞ御帰洛もちゝまハめゞゞ。此度の供奉ハ及ぶ旅の用

意ゐどゐー果て後走る。家の舊記をも御覽ゐ備へ奉べーと。
怨ゐ命下さるけれバ。右門ハ恩命その身ゐ餘りて一時ゐ面目を
施しく。元の岸邊ゐ送らるて。ゆをゆ船より跂登りおのゞ家路ゐ
くゝりける心のうちいふうるしーうけんー。

三國一夜物語卷之一了

イ
ヨ
貸本所
松山本町三丁目
野中栄吉郎